

閉会の挨拶

復旦（陳） 皆様にご紹介させていただきます。国際関係・公共事務学院副院長の林先生です。これから先生にご挨拶いただきます。

林尚立教授 まず、第二回中日国際関係研究討論会が滞りなく開かれましたことを、大変嬉しく思います。昨年は私も討論に参加しました。討論の議題には大きな関連性がありました。このことは、これらの議題に対して皆さんが非常に関心を持っておられることを証明しています。中日両国間の問題は 21 世紀に向けた戦略問題なのです。これは我々青年が担うべき責任です。我々は皆、政治学を研究する者です。古代の著名な思想家アリストテレスには非常に基本的な言葉があります。「我々は問題を研究するだけでなく、社会の進歩、人類の発展、そして良好な政治枠組みのために研究を行わなければならない」。それゆえ我々が努力する空間は非常に大きいのです。両国の交流は相互信頼と相互理解を深める非常に重要な基礎です。こうした交流は継続可能だと思います。交流が無ければ、誤解もますます深まってしまう。勿論、政治を研究する学者という立場から述べますと、我々の交流は情報の交流だけでなく、未来のデザインのためでもあるのです。この分野には真摯な心だけでなく、優れた知恵も必要です。歴史、現在、未来の全てをしっかりと把握しなければなりません。これは我々二つの影響力のある学校の学生が努力すべき目標です。

私はかつて慶應で一年間研究をしたことがあります。私の研究分野は日本の政党です。ですから、先ほどの議題に関して私もある程度理解しております。中国に帰国した後は、中国の政党を含めた中国政治の研究に取り組

んでいます。本日の討論を聞き、まだまだ日本政治を研究し続けなくてはならないと思いました。このプロセスで問題解決の道を探るのです。

最後に、皆さんが私に多くの考え方を与えてくださったことに感謝したいと思います。皆さんの討論を聞きながら多くの問題について考えました。しかし両国の地理的、歴史的な親密関係は変え難いと思います。これは双方にとって好都合です。夫婦が離婚していいのとは違い、離れようとも離れられないのです。それゆえこれらの問題は解決しなければなりません。勇気を出さなければなりません。もちろんより重要なのは誠実な心です。来年もこのような研究討論会が行われることを希望します。ありがとうございました。

樊勇明教授 少しだけお話しします。今日のこの会は第二回目です。先ほど私たちの二回にわたる成果について、林先生がすでにうまくまとめてくださいました。二回の会議は時間こそ短かったですが、中日関係のほとんどの問題について討論したように思います。現在すでに学者である人や、将来学者を志している人が多いため、分析の角度にも様々なものがありました。中日間には多くの問題が存在しますが、中日の経済分野での関係は飛ぶような速さで発展しています。今日は一つデータを提供します。本年上半期の日本の対上海投資は、四年ぶりにアメリカを抜いて第一位になりました。その他、人材面での交流も、各方面で我々の予想を上回る成果を上げています。まさに先ほど林先生が述べられたように、我々は問題を提起するだけでなく、勇気と知恵を絞って将来をデザインしなければなりません。小島さんとまだ細かく話し合っていないかもしれませんが、小島さんは私の考えに必

ず同意してくれると思います。なぜか？我々のこの会議は、意見を交換するだけでなく、問題を研究し、討論し合わなければならないと思います。

日本側の学生も遠路はるばる上海にやってきて、このように少し言い合っただけで帰ってしまったのでは何の意味もありません。中国側は新学期が始まったばかりで、もっとも忙しい時期に、皆がこの会議に参加したのは一定の成果を得るためでした。皆さんどうでしょう？本日討論した幾つかの問題をまとめた後、幾つかの専門グループ振り分け、インターネットを通じて専門的に研究するというのは？例えば調査団の問題について、どこに行ったか、回数だけでなく、どんな場所にいったのかも研究する必要があります。そして教科書問題については、新しい教科書の問題は一体どこにあるのか？さらに日本で現在使用されている教科書は全体としてどのような傾向があるのか？そして中国の教科書制度とはどういうものか？中国も教科書は一冊だけではなく、多くの選択の自由があります。さらに例えば、中国にとってどのような日本が最も信頼するに足るのか？これらは全て我々が勇気と知恵を出して研究する必要がある問題です。少しずつ具体的に建議していく必要があります。数年の研究の後、それらの成果をここか、藤沢に持っていきましょう。そうすれば我々の討論は、よくあるようなものではなく、真に中日両国の未来設計図案になるでしょう。

上海にお越しくださりありがとうございます。また中国側の皆も時間を捻出して会議に参加してくれてありがとう。そして、今後、これまで小島先生と私の二人がやってきましたが、今後は学部のレベル、すなわち公共事務学院と総合政策学部のレベルまで高める必要があります。今後ランクのアップに応じて、質も向上させなくてはなりません。ありがとうございました。

小島朋之教授 私の方からも感想とお願いを申し上げます。復旦大学の学生の皆さん、学期がはじまったばかりの忙しい時期の2日間、我々との対話に参加していただき、本当にありがとうございました。感謝しております。樊先生、臧先生、林先生にはわざわざお出ましいたいただき、学生一同感謝しております。

最初に、1972年9月15日に田中角栄首相と会った毛沢東の言葉を紹介したいと思います。その言葉は「お互いにケンカをしましたか？」というものです。ケンカをしなければお互いに理解できない。私は、中国と日本の皆さんが率直に意見を述べ合うことが重要だと思う。きちんと自分の意見を表明しなければ、相手も自分を理解できない。理解できなければ、お互いに相違点を整理し、新しい一致点を見出すこともできません。理解のためにはケンカをしなければならぬが、そのためにも「事実求是」が必要だと思います。その点、今回の日本側、中国側双方に、事実に関する理解不足がまだまだ見られました。それを逐一指摘すると10時間ぐらいかかるのでしませんが、私に直接関わる二点についてだけ、指摘したいと思います。まず日本側の事実の誤りですが、小泉首相の靖国神社参拝が2日前に前倒しとなった原因はまちがいにアメリカの圧力です。そして中国側の誤りですが、陳水扁現台湾総統が総統になる前に訪日した際、日本の首相と会った、というディープスロート そのうちの一人は私ですが が明らかにした情報は間違いです。私も陳水扁氏を招いた一人ですが、彼を日本の当時の首相に会わせたことはないし、首相は陳水扁氏に会っておりません。というわけで、事実に基づいた議論が重要である、ということをお願いいたします。

それから、樊先生がおっしゃった日中関係に関する考え方には、私は200%賛成したいと思います。現在の日中関係は、今日皆さんが議論したように、様々な問題を抱え、よく

ない状態だという意見があります。しかし会議の冒頭で申し上げた通り、私は様々な問題があっても日中関係が決定的に悪化することはないと考えます。つまり私は日中関係に関する楽観論者であります。その理由は樊先生がおっしゃった通りなので繰り返しません。一つ付け加えると、日中関係がよくなってほしいという期待はアジア諸国に広く拡がりつつあると思うからです。おそらく近代 160 年の歴史で、東アジア地域における日中協力の確立がこれほど期待されたことはなかったのです。そうした要素を考慮して今後の日中関係を考えてほしいと思います。その時、私は歴史認識の違いをお互い理解しあうことが何より重要だと思います。歴史認識を「共有する」ためにも、「違い」を理解してはじめて可能になることなのです。今日、皆さんがおこなった議論では、まだ「違い」を理解するまでには至っていません。

さらにもう一点、日中関係を揺るぎないものにするためには、「歴史」といったとき、どのような歴史として考えるかということがあります。1985 年、当時の中曽根首相が靖国神社に公式参拝した直後、胡耀邦総書記が社会党訪中団に対して語った言葉です。彼は「我々は日中関係を考えるとき、2000 年の長さの中で考えなければならない」と言いました。私は胡耀邦氏ではないのでそんな長いスパンで考えることは到底できませんが、少なくとも近代 160 年で日中関係を考える必要があると思います。その中では、日本が中国を侵略した事実だけでなく、お互いに協力する可能性があったことにも気づくはずで、我々は歴史の中の教訓、様々な歴史の可能性から、未来の歴史を築くべきなのです。

最後に、「継続は力なり」ということを申し上げたいと思います。今回は 2 回目の会議でしたが、1 回目はお互いに勉強し、2 回目はお互いに遠慮せずに議論しました。ケンカだけしてこのまま別れるわけにはいきません。

つまり 3 回目を必ず実現しなければなりません。できれば上海復旦大学の皆さんが慶應義塾大学総合政策学部と環境情報学部のキャンパス、SFC に来ていただきたいのですが、そのためには色々な方法を考えなければなりません。今後、我々 SFC と復旦大学国際関係公共事務学院との間に密接な関係をつくりたいと思いますので、何らかの方法が見つかるでしょう。それまで、樊先生がおっしゃったインターネットを使った試みは可能でしょう。例えばディスタンス・ラーニング、すなわちインターネット会議を用いた交流も可能でしょう。我々としては様々なメディアを活用して交流を深めていきたいと考えています。復旦大学の先生、学生の皆さん、今日は本当にありがとうございました。

樊勇明教授 日本側と中国側の幹事は起立してください。拍手で感謝の意を表しましょう。(拍手) あなた達の努力がなければ、今回の会議は成功しませんでした。それぞれ一言をお願いします。

慶應(真鍋) 我々はせっかく出会った仲間なので、21 世紀に向けて日中関係を創造できればと思います。今回の会議の成功はほとんど陳霞さんによるものでしたが、私もこのような会議に参加できて本当に嬉しく思います。ありがとうございました。

慶應(叶) この会議を通して慶應義塾大学、復旦大学だけでなく、日中関係に良い結果が得られたと思います。日本に住み、日中間で生きている中国人として、また幹事として、大変嬉しく思います。陳霞さん、皆さん、ありがとうございました。

復旦(陳) もう時間となりました。閉会の前に、今会議の中国側の主な担当者を紹介したいと思います。まず、蘇宗文君です。そして趙玲麗さん、朱錦屏君、趙君、鄭浩瀾さんです。私自身は日本側の学生との連絡係を務めましたが、他の学生の努力がなければ、今回の研究討論会は順調に開催できなかった

閉会の挨拶

と思います。今回の研究討論会は、私と蘇宗文君にとっては二回目ですが、同時に最後でもあります。私たちは来年には卒業します。本当のことを言うと、このような研究討論会を取り仕切るのは大変なのですが、今回の会議を通じて私たち二人は多くのことを学びました。この機会をお借りして、先生方に感謝申し上げます。そして、来年もまたこのよう

な研究討論会があるのなら、皆さん、私たちの後継者を助けてくださるようお願いします。最後に慶応大学側の通訳担当者の李さんに感謝したいと思います。彼女の素晴らしい通訳がなければ、今回の会議はここまで捗らなかったことでしょう。

完

